

デーリー東北

2022年(令和4年)9月13日(火曜日) (21)

私見 Tuesday 創見

前回、人形浄瑠璃文楽の衣装を取り上げたところ思わぬ反響があったので、文楽衣装についても一節。

東京・半蔵門にある国立劇場で「初代国立劇場さよなら公演」が開催された。1966(昭和41)年に開場した現在の国立劇場は、改修工事のため来年10月にいったん閉場する

こととなっている。そのさよなら公演として、今月3日から人形浄瑠璃文楽9月公演が始まっている。

今回の演目は、『奥州安達原』と『碁太平記白石断』で、くしくも東北に関連する演目となった。『奥州安達原』は安倍貞任、赤任兄弟が一族再興に挑む物語、『碁太平記白石断』は奥州白石の姉妹による仇討ちを題材とした話である。

「逆井村の段」は、何と51年ぶりの復活公演とのこと。さよなら公演にふさわしい特別な構成となっている。白石といえば上質な和紙の産地。和紙を細く裂いて糸にした物を織り上げた紙布は、非常に軽くて吸湿性の高い織物である。先日、古着屋の展示会で、東北産の古い紙布のはんてんや、漁網のリサイクルルとして織られた網織など珍

文楽衣装考拾遺 ~国立劇場さよなら公演に寄せて~



かわもりた・れいこ
1967年、旧福地村生まれ。東北大学文学部卒。八戸工大二高を経て、2001年より八戸工業大で勤務。人形浄瑠璃文楽などの伝統芸能や染織に関わる伝統文化、特に南部菱(ひし)刺しが研究テーマ。第3回インテリジェント・コスモス東北文化奨励賞を受賞。文楽はちのへ塾主宰。

川守田礼子 八戸工業大 感性デザイン学部准教授

人物を実体化する装置

しい物を拝見した。南部地方ではアイコ(ミヤマイラクサ)から糸を取った。秋田にはゼンマイの綿毛も水鳥の羽毛を織り込んだ布がある。さらに、和紙そのものを材料とした着物を紙子という。

昔の人々がさまざまな素材を衣生活に活用していたことに驚く。さらに、和紙そのものを材料として身を持ち崩した果ての境遇を、この紙子が象徴する。紙衣とも書き、柿渋を塗った厚い和紙をもんで作る。『麻文章』の伊左衛門が着用する着物としてもおなじみである。大店の若旦那が遊郭通いで身を持ち崩した果ての境遇を、この紙子が象徴する。ほかにも、余り布を集めて縫き合わせた切継、肩から胸の部分に別布を並べた肩入などがあり、質素や零落を表現する。着古した物のリサイクルルとしてこれも衣生活における知恵の一つだ。

文楽の衣装は、登場人物の身分や境遇を直観的にあらわす。『伊達娘恋純麿』の主人公は八百屋お七。富家の娘らしいせいたくな麿子紋りの衣装を肌隠しにし、一心不乱に火の見櫓に登る印象的な場面がある。『新版歌祭文』は一人の男をめぐる三角関係を描いた物語だが、二人の娘の衣装が対照的だ。都会の商家の娘お染が、華やかな模様の友禅染の振り袖を着用しているのに対して、田舎の娘お光は石持の無地紬の地味な振り袖を着ている。石持とは本来、定紋を置く位置を丸く白抜きにしたもので、現代は仕立て前の黒留め袖などにしか見られない。文楽ではお光のような田舎娘や下級武家の妻女などの衣装として出てくる。正月の晴れ着として精いっぱいのおしゃれをするお光のけなげさが伝わる衣装だ。

文楽人形の胴体は空洞構造になっており、肩から手足がつけられただけの構造である。これに人形遣い自身が衣装を着せることで、初めて人形に肉体が与えられ、生命が吹き込まれる。衣装の素材や色、着付け方は役によって異なる。衣装は体の表面を覆うだけでなく、人物そのものを実体化する装置なのだ。時に大胆に、時に繊細に人形を操る人形遣いは、衣装の皮膚感覚に敏感だ。哲学者の鷲田清一が「ファッションは社会の生きた皮膚である」と称したことを思い出す。さて、秋の地方公演として今月末に弘前市で文楽公演があるのがうれしい。午前は世話物の『曇夜飛脚』、午後からは時代物『福原伝授手書』と名作ぞういである。いずれの作品でも、衣装という観点から見て、工夫があるので、観劇に行かれる方はぜひ注目してください。

※この記事・写真等は、デーリー東北新聞社の承諾を得て転載しています。